

日本を支えるKANSAIモノづくり企業(180) 平安製作所

低コスト工法で新興国に対抗

軽量化やコスト低減、燃費向上などの課題に向けた技術開発が進む自動車業界。そうした動きを陰で支えているのが平安製作所だ。プレス加工技術を生かしたエンジン部品やトランスミッション部品が主力で、金型の設計・製作から溶接・組み立て、塗装までを一貫して行う。製品の98%が自動車関連だ。

同社は1990年代からVA(価値分析)活動を積極的に行い、新しい技術や工法を相次いで開発してきた。例えばドライブプレートでは、従来の切削歯車とプレスプレートを溶接する工法をプレスによる歯形成形に変えて軽量化と35%のコスト低減を達成。複数の大手自動車メーカーに採用されている。また経済産業省の支援を受け、積層構造の採用でエンジン始動時のかみ合いの騒音を30%軽減したギアを開発した。こうした新工法による自社開発品は受注全体の約60%を占める。

同社の取り組みは国や自治体からも注目されている。二つの部品を組み合わせる工法からプレスでの一体成形にして回転数の検知性能向上を果たした無段変速機(CVT)用のピストンは、12年11月に関西のモノづくり企業の販路開拓を支援する近畿経済産業局の「関西ものづくり新撰」で新技術・新製品として選ばれた。

プレスを用いた折り返しや絞りといった工法も開発。インナープレートの加工を一体成形にすることで溶接を不要にしたほか、一枚の鋼板をリング状に成形することで材料費の半減にも成功。今後も低コストや軽量化を追求する同社の技術革新はやむことがない。

グローバル競争の激化で自動車メーカーの海外生産移管が相次ぐ中、荒木邦彦社長は「海外に工場をつくり進出することは瞬間的にできる。しかし日本から技術者を現地に送れば国内のモノづくりが崩れてしまう」と国内製造業の空洞化を危惧する。日本国内で勝ち残るため、新技術開発も含めた独自のモノづくり体制構築を進めている。

同県高島市の工場のレイアウトを改善するほか、13年6月には加圧能力2000トンのサーボプレス機を導入し、新製品の開発や量産に取り組む予定だ。サーボプレスで「より品質の高い部品を安定して生産できる」(荒木社長)と見込む。一連の取り組みにより、コストが従来比30%低減可能な生産体制を整える。人件費の安い新興国を中心とする海外に対抗して競争力を高める狙いだ。

また同社は確立した技術や工法で生産した製品を、ライセンスのような形で海外メーカーに販売することも検討している。将来を見据えた人材面や財務体質の強化にも力を注ぐ。

▽社長＝荒木邦彦氏▽所在地＝滋賀県高島市マキノ町中庄464、0740・27・2161▽従業員＝165人▽製品＝自動車向け金属プレス部品▽URL＝www.heian-mfg.co.jp

(水曜日に掲載)



国内のモノづくりを徹底的に追求しグローバル競争に勝ち残る